

飯沢匡喜劇集 Ⅱ

飯沢匡喜劇集

第2卷

収録作品

崑崙山の人々

還魂記

二号

ヤシと女

解題・演劇的自伝(2)

未来社刊

飯沢匡喜劇集 第二卷

一九六九年十二月二〇日 第一刷発行

定価 七五〇円

◎著者 飯 沢 匡

発行者 西 谷 能 雄

発行所 株式会社 未 来 社

東京都文京区小石川三の七

電話（八一四）五五二一〇代表

振替（東京）八七三八五番

本文印刷〓ひろせ印刷

装本印刷〓形成社

製 本〓今泉誠文社

乱丁・落丁本はおとりかえます。

飯沢匡喜劇集 第二卷 目次

崑崙山の人々 3

還魂記 25

二号 47

ヤシと女 143

解題 249

演劇的自伝(2) 261

崑崙山コンロンの人々

(一幕)

登場人物

何仙人

珉仙人

静仙人

（大変な老齡）

陶

（仙人の侍童 十三歳くらい）

細谷

（元、陸軍航空中尉 二十三歳）

土井

（理学博士 三十八歳）

本田

（労働代表 三十五歳）

フラミンゴ

（紅鶴の雌 年令不詳）

チン (あまり気が入らずに) ははあ、なるほどな。
ふうん。

舞台はいわゆる仙境。南面の懸軸などによくあるつくね、芋然たる高岳が重疊している。中央に少しく岩の平な所があつてここが仙人の棲家になっている。爐の火の上には仙薬を煮る鍋がかかつて湯気が立昇っている。上手の小高い岩の上には碁盤が置いてある。他には岩と高山植物らしい丈の低い草木しかない。幕が上る前オウ！ ャッ！ というかけ声。最後の声とともに幕が上る。中央の腰掛みたいな岩の上にミンが端坐している。しかしミンの首はない。その上手に利剣を手にしたホーが大見得を切っている。たつた今、ミンの首を切ったところである。ミンの首は少し離れた岩の上に載っている。首は目を瞑っている。下手の方でチンが後手でん気に立ってそれを眺めている。

ホー (興奮して昂然と) どうじゃち？ やんと切れ
たじやろうが？

チン そうじゃな。

ホー さあさあ、さっそくわしのを切って、くれんか。

チン そりゃ切ってもよろしいがな。そこものごとくわしは武人の出ではないからな。手際のほどはおぼつかんのでな。

ホー なあに、これは手際で切れるんではないわ。この刃じゃ。長年にわたって鍛えたこの刃じゃ。

チン いやわかつておるわかつておる。八百五十年間ホー仙人が毎日トンテンカントンテンカンと苦心した賜物！ そう申せばそことは気がすむのじゃろう？
ハハハハ。

ホー 何でもよい、そんなことは……。まあやってごろうじろ、切れ味はわかる。

チン そうかな。ではやってみるかな。(不器用に剣をかまえて) とうかな？

ホー もう少し足を開いた方が力が入るじゃろん。うん、そうそうじゃ。

ホーは岩に腰をおろそうとする。首のないミンは膝を送ってホーに席を作る。

チン やはり、そこもとのごとくヤツとかかけ声をかけるものかな？

ホー そうじゃな。必ずしもかけんでもよいがしかしまあかけたほうが力が入るものじゃよ。その昔、わが軍門に降った敵将や軍律を犯した部下の首をはねた時はそりゃもう盛大なかけ声をかけたものじゃ。第一、士気を鼓舞するでう。

チン そこもとはそうであらう。どうもわしには出そうもない。やはり懸声は懸けぬことにする。ではそろそろ切るぞ。よいかな。

ホー ああわしはいつでもよいぞ。(目をつぶる)

チン (しきりと何べんも振りあげているが自信がない。そのうちに目をつぶっていたホーは首のないミンによりかかって居ねむりをはじめる。チンはそれをみて剣を小脇に爐の傍により鍋の蓋をとって柴の工合を確める。剣でかきまわしている)

ホー (首のないミンに肩すかしを喰わされて目を覚

して) まだかな。

チン (あわててもとの位置に戻り) いやちょっと仙葉の工合をみておったところじゃ。では、やる。ヤツ!

と力のない声で切りつけるが全然ホーの首は落ちぬ。

ホー やったのかな。

チン やったとも。どうも切れぬようじゃな。

ホー 切れてるのかもしれない。あまり切れすぎると首は落ちぬものじゃからな、(と自分の首に手をやる) うーむ。こりゃいかん。切れておらん。

チン きつとわしの手際が悪いのじゃらう。

ホー 大抵の者に切れるはずじゃがな。では一つ自分でやってみるか。

チン そうじゃそうじゃ。それに限るて……しかしその前にわしのを切ってくれんか。そこもとが自刃してしまつたらこのわしはどうなるのじゃ。

ホー おぬしもこれで自刃すればよからう。

チン 自刃? 自分で自分の首をはねるなどそんな気

持の悪いことはわしにはできるものか。そこもとちがってわしは武人の出ではないからな。作法もやり方も知らぬのじゃよ。

ホー どうも手の焼けるやつじゃな。よしそれならばやってやるわ。さあさあ早うここへ直りなされ。

チン (岩に腰かける。またもやミンの首なし死体はチンの為に膝を送る) こうかな。(と首を前に出す)

ホー そんな谷底を覗くような恰好をしなくともよい。よいか、ヤッ!

トタンに照明消えて暗黒。ハハハハという笑声が起る。まだその笑声が終らぬうちに照明つく。

ホーはみごとにチンの首をはねた。その証拠には岩の上にミンとチンの首のない死体が端坐してるからだ。ホーは剣をふりまわし、勢あまってキリ舞いをして尻持ちをついてしまう。両側のちよとした岩の上にミンとチンの首が載って盛んに笑っている。

ホー ー なんてご両所は笑うのじゃ。

ミン ハハハハハ。おぬしの尻持ちがおかしいのじゃよ。

チン わしは首を切られても死ねぬわが身がおかしいのじゃ、ハハハハ。

ホー (起き上って) 勝手に笑っておれ。(剣を拾って無念そうに眺めている) むう。首は切れても命を絶つまでは行っておらん、鍛え方が足りなかったか。こりゃ失敗しくじったか。

ミンとチンの死体はそろそろと立ち上ってそれぞれ首のある岩の後に行く。とたちまちに首は胴体につながってしまう。

ミン 要するにホー仙人、八百五十年間の苦心も水の泡ということになったわけじゃな。

チン と申してもよしまたわしらの不老不死の薬もなまなかのものではないということにもなるわけじゃと。

ホー おぬしたちはそんなのん気なことばかりいうておるからいつまでたっても死ねぬのじゃぞ。

ミン そう怒りたもうな。ホー仙人。おぬしの剣の切れ味は大したものじゃったよ。

チン そうじゃそうじゃ、ともかくわしらの首はあの岩まで飛んでしまったのじゃからな。大できじゃ。

ホー 何とでもいえ。おぬしたちは人が悪い。このわしをかついだんじゃ。切られたふうをしたことはわかっておるわ。だがもう一息じゃ。あと百年もしたらたちまちにおぬしらの息の根をとめるすばらしい切れ味にしてみせるわ。

ミン そうじゃそうじゃ。一つぜひ頼むぞ。

チン 百年などといわず、明日でもよいわ。早ければ早いほどよいわ、ハハハハ。

ホー 何とでもいえ。その時になって驚くなよ。よし鍛え直して来る。(プリプリして去る)

ミン せいぜい本当に切れるやつを作るまでは現れないで欲しいものじゃ。

チン さすがにあのお人好しもわしらが分身の術を使つたことはわかつたらしいな。

ミン フン、これでまた暫くはホー仙人もうるさくわしらにつきまとわぬじやろうて……。

トンテンカン トンテンカンと刀を鍛える音がして来る。

チン はあもうホー仙人さっそく鍛冶屋をはじめおつた。ハハハハ。

ミン それはそうと葉はどうじゃな？

チン うんうん。そろそろのようじゃ。さっきみたが……。

ミン 一つやってみるかな。

チン よからう。

二人は爐の傍に行く。鍋の中味を二つの碗に注ぎ一つをミンに渡す。

ミン いやかたじけない。どりゃさてどうかな。

二人はちびりちびりと飲む。

チン 大分強くなつておるようじゃな。

ミン ふうむしかし大したことはないな。

その時ひそかに飛行機の爆音がする。

チン うん、そうじゃミン仙人。

ミン 何じゃな、チン仙人。

チン あれをお聞きかな？

ミン 毎日インドに行く定期航空であろうがな。

チン そうじゃ。

ミン それがどうしたんじゃ。

チン いや、わしはこれのために、（鍋を指しながら）
もっと人手が必要じゃと思うんじゃが……どんなもん
であろうかな。

ミン なるほどな。あの童^{わらわ}だけでは心もとないかな。

チン 多々益々弁ずじゃよ、それに今日の飛行機には
な、ちょっと役に立ちそうなのが乗っておるんじ
ゃよ。

ミン しかし紅毛人はご免じゃよ。どうもあの輩^{やから}はこ
の仙境にはふさわしくないでな。

チン いや大丈夫、そこは心配ない。日本人じゃ。

ミン また、日本人か。いつぞやの童も日本人であつ
たろうが……。おぬしよほど……。

チン いやいや同じ生国のものは何となく情が移って
コキ使えんでな。他国のものに限るんじゃ。

ミン まあそれもそうじゃな。それで今日はどうい
うのが乗っておるのじゃ？

チン （あたりを見まわしミンの耳もとに口を寄せく
しゃくしゃと何かいう）

ミン そりや本当かな。そりや大したものじゃ。全
くもってちかごろ耳よりの話じゃ。さっそくに……。

チン しかしそれにしてもその博士も仕事には助手が
必要じゃろうて。

ミン そうじゃな。そりや助手があつたほうがよか
ろう。

チン ちようどもう一人、手ごろな日本人がうまいぐ
あいに乗れ込んでおるから、そいつを使うことにし
ようではないか？

ミン よかろう。万事おぬしにまかせたわ。

チン よし、おやおやもう飛行機はどこかへ行つて
しまったわ。どれどれ、（と耳に手をあてがってきく）
はあこちらか。ではそろそろ引き戻すか。

軽々と上手の岩に飛上るときりつと手で引きよせるように空中を掻く。次第々々に飛行機の爆音近づく。

ミン やる時は例のいつもの絶壁でやるかな。

チン まああすこが一番手ごろじゃろうて、エイッ。

(と気合をかけると同時に遠くで猛烈な爆発音、たちまちに火を發して煙が上る。飛行機は哀れや岩壁に衝突して搭乗員何十名かは惨死してしまったのである)

ミン さあ。二人の体をとり出さねば……。ぐずぐずしておるとこの間の童の時のように焼けてしまつて旧に戻すに手数がかかるぞ。

チン よしよしさあ参ろう。(岩から飛降りる。そして二人はヒラリと杖にまたがると空中を飛行して惨事の現場の方に飛去ってしまう)

暫く舞台は空虚。またもやトンテンカントンテンカンとホーの鍛冶の音がしてる。やむとホーが出て来る。大きな黄色な蝶が飛んでる。

ホー ヤッ! (とその蝶を切る。蝶はまっ二つになつて別々の方向に飛んでゆく。それを満足気に見送つてから) ヤッ! (と今度は自分の首を切る。そして恐る

恐る自分の首を押す。しかし首は依然しつかりと首の座についているので、しおしおとして去る)

そこに細谷中尉がタオ童子と一緒に出て来る。二人とも手籠を提げている。草や石が入っている。細谷は軍服を着ているが頭はタオ童子と同じく、いわゆる唐児まげ——即ち司馬溫公髷割りの図などでお馴染みの童子のごとく大部分の髪を剃った結い方である。

細谷 おやおや先生方。お出かけかな?

タオ ええ、今日の午後は膽所のチャン仙人からまた試合を申し込んで来てましたからね。きつとお出かけですよ。

細谷 よくもまあ、ああ暮ばかり打つてて飽きないな。

タオ だって他にやるのがなけりゃ仕方がないでし

よ。碁もね、もう大抵の手は打ってしまったとかいつてましたよ。でも他の遊びに比べたら碁はずいぶん複雑ですからね。飽きないほうじゃないんですか。

細 谷 そうかね、俺は碁も将棋も知らん。とうとう戦地でも覚えなかった。やりたいとも思わんがな。

タ オ ハハハ、細谷さん今はあなたそんなこといってますがね。そのうちにこの生活に飽きてきたらあなただって碁を打ちはじめますよ。

細 谷 そうか？

タ オ そうですとも、まあ今は先生方、薬の製造に夢中になってこうして私たちに珍しい草や石を探させていますかね。ここいらにある草や石なんてすぐに種切れになりますよ。

細 谷 そうかね？

タ オ そうですとも、こんな草や石の種類なんてあるようで数は知れたもんですよ。あと二百年も経てば全部とりつくしてしまいますよ。

細 谷 二百年？

タ オ ええ、たった二百年ですよ。

細 谷 たったというのかい、お前は？

タ オ どうもあなたにも困りますね。もうあなたは仙薬を飲まされて仙界の人間になったんですよ。仙人の仲間入りしたんですよ。そろそろ十年になるんじゃないですか。

細 谷 まだ二十分くらいしか経ってないみたいだよ。

タ オ まあ最初は私もそうでしたよ。これで私は漢の武帝の時に生れたんですよ。

細 谷 え？

タ オ あなた漢の武帝っていつごろの人か知ってるんですか、知らないんですよ？

細 谷 俺はどうも東洋史は苦手なんだ。よくわからないんだが、千年くらい前かね？

タ オ いやです。その倍です。二千年ですよ。

細 谷 へえ、きさまは二千年前に生れたのか。そうかね。えらいもんだ。

タ オ 別にえらいとか、そういうものじゃありません。要するに大したことありませんよ。何しろ私たちは不老不死なんですからね。

細 谷 不老不死？ へえそうかね。

タ オ どうもあなたは永久に生きてゆくなんてことに

実感が持てないらしいですね。

細谷 持てんね。

夕オ まあ無理ありませんよ。私だってここへ来たてはね、永久に生きるとか不老不死なんて言葉はピンと来ませんでしたよ。だけど二千年も毎日生きて来るとかね、ようやくおぼろ氣に不老不死ってどんなことかわかって来たんですよ。

細谷 そりゃ結構だったね。

夕オ ちつとも結構じゃありませんよ。実に嫌な気持ちのまんなんですから……。

細谷 そうかね。そういうもんかな。

夕オ そうですとも。今にあなたにもだんだんわかって来ますよ。まあその前に多分あなたは碁をやるようになるでしょうがね。

細谷 そうかね。

夕オ まあ二百年も経てばね。しかしまあそれより前に先生方が仙人も死ぬるような薬を作ってくださいることを望みますね。

細谷 仙人も死ぬる薬？

夕オ そうですよ。ここで今煮えてる薬もそれだし。

それからこの草や石もその材料ですよ。

細谷 これは驚いた。どこもかも死ぬことに努力してるんだな。

夕オ え、何ですって？ 妙なことをいいますね。下界の俗世間の人間のあいだじゃ何とかして生きること、に苦心してるんじゃないんですか。

細谷 いやそんなことない。俺は軍人だが「武士道とは死ぬこととみつけたり」と教えられてね。専ら死ぬために精神修養をして来たんだ。

夕オ おやおや話が変ですね。私の俗世間にいたころは時の帝は^{みかど}はじめ誰でも何とかして仙人の薬を手に入れて不老不死になろうとしていましたよ。

細谷 そうかね。俺もずいぶん修業したがなかなか死ぬ覚悟をすることは並大抵のことじゃないぜ。

夕オ まあ二千年も生きりゃ自然に覚悟はできるんですよ。

細谷 ふうんそういうものかね。

その時土井と本田が出て来る。

本 田 あつ、しめた、人がいた。

土 井 (非常の時には気取りを忘れずに) ああ、おや日本の軍人らしいじゃございませんか。

本 田 もしもし。

細 谷 何でありますか。

本 田 こりゃありがたい。あなたは日本人ですね。

細 谷 そうであります。(相手がじろじろとみるので) ああこの頭はちよつとみようでありますが主人の命令なんであります。

本 田 そりゃともかくとしてですが、ここから一番近い街はどこでしょう、教えてくれませんか。

細 谷 さあ、どこか自分は知らないのであります。君知つとるかいい？

タ オ さあね。ウエンハオかな。ともかく私たちは全然町には縁がありませんからね。

本 田 しかし食料とかさういったものはどこから持つて来られるのです？

タ オ 食料ですか？

本 田 そうですよ。

タ オ (指を挙げて) ここからです。

本 田 え？

タ オ つまり気ですよ。

細 谷 空気のことなんであります、つまり霞を喰つとるんであります。

本 田 冗談はいわないでください。私たちは大変急いでるのですからね。

土 井 ご承知でしょう。さっきあっちの方で大きな音がいたしませんでしたか、私たちは飛行機で遭難したんですよ。霧の中でどうしたことかレーダーが利かなくなつてしまひましてね。それで一時間もあっちこちと飛んでるうちにとうとう岩壁につき当つてしまつたんでございますよ。

本 田 しかし神の加護なんでしょう。この二人だけは奇蹟的としかいえませんな。身に微傷だに負わずに柔い草の上に投げ出されたのですよ。今から二十分ほど前に気がついて歩き出したんですがね。

土 井 お気の毒に他の二十三名の塔乗員の方がたは全部惨死なさいましたよ。死体もすっかり焼けてしまひましてね。

この間タオは細谷に耳うちする。少しく審いよつているが、やがて細谷は合点々々する。

本 田 ねえ、ともかく私たちは急いでるのです、一刻も早く目的地に着かねばなりませんのね。

細 谷 インドに行かれるんですか。

本 田 そうです。今日カルカッタに着く予定でした。

細 谷 はあ、独立運動でありますな。

本 田 いやもうインドは昨年独立しましたよ。私の目的地はチューリッヒです。スイスです。新聞でご承知でしょう労働会議には私は特にその筋から許されてね。労働代表で出席するんです。あの本田ですよ私は。もう今日から会議は始ってるんでしてね。明後日までにはぜひとも着かなくちゃならないんです。

細 谷 (土井に) あなたもスイスに行かれるんですか。

土 井 いいえ、私はコペンハーゲンなんです。ございます。世界毒物会議がこの十日から開かれますのでね。私は学会からぜひにと招待されたもので……。私こういうものでございます。どうぞよろしく。(と名

刺を出すが横文字なので)

細 谷 タメオ・ドイ、ああ土井さんでありますか。

土 井 どうも横文字の名刺しかございませんでね失礼。大学の薬学教室にあります。

細 谷 あの帝大でありますか。

土 井 ご承知のようにでございますね。戦争が終つてからは帝国大学とは申さないことになっておりますのでね。

細 谷 え？ 戦争、あの大東亜戦争は終つたんでありますか、本当でありますか？

土 井 ああその大東亜戦争という言葉もこのごろは使われないでございますよ。太平洋戦争と申します。ハハ。

本 田 どうもあなたは何もご承知ないようですね、まあこんな山奥におられちゃ無理もないですがね。

土 井 あなた、どうしてこんなところにいらっしゃるんですか。

細 谷 事情は全くあなた方と同じなんです。偵察飛行をしとる時であります。急に霧の中に入ってしまったんであります。そしてさんざんぐるぐる引張り